

Title	オーストラリア国立大学 Japanese Studies Graduate Summer School 参加報告
Author(s)	林,葉子
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 109-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25561
rights	
Note	

## The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## オーストラリア国立大学

## Japanese Studies Graduate Summer School 参加報告

林 葉子

底冷えする1月の夜、関西国際空港を発って、次の日に降り立った場所は夏の真っ昼間だった。乾いた空気、強い日の光に輝く緑。オーストラリアでは、鳥の鳴き声さえ日本とは違う。日本で私を取り囲んでいた〈当たり前〉の景色から解き放たれて、私は首都・キャンベラにあるオーストラリア国立大学(ANU)へ向かった。

今回参加したANUのJapanese Studies Graduate Summer School 2012(2012年度日本研究大学院生夏期研究発表会、以下「サマースクール」と略記)は、大学院生の研究発表と先生方の基調講演を中心とする研究・交流の場であり、2012年1月30日から2月2日まで、4日間にわたって開催された。発表者として、オーストラリア、日本、ニュージーランド、ドイツ、中国、イギリス、フィンランドの大学から計29名が集い、シンガポール国立大学のサイモン・アンドリュー・アヴェネル Simon Andrew Avenell先生と、神戸大学の塚原東吾先生の基調講演が行われた。

大阪大学大学院文学研究科・日本学研究室のメンバーがこのサマースクールに参加したのは、2011年が最初である。その前年にANUに出張した北原恵先生がサマースクールの情報を得て、日本学研究室でご紹介なさったのが始まりだった。2011年のサマースクールの終了後、日本学研究室では、参加者の一人であった大学院生の柿田肇さんから体験談を聞く機会が設けられた。その柿田さんのお話に、すでに大学院を修了している私も触発されて「参加してみたい」という気持ちが募り、ポスドクとして申請してみたところ、嬉しいことにANUから参加を認める通知が届いた。その後も柿田さんからは、研究発表会の内容や会場の雰囲気についてだけでなく、ANUにたどりつくまでの交通機関、ANUの寮の設備、オーストラリアでの食事等について、さまざまなご助言をいただくことができたので心強く、研究発表の準備に集中して取り組むことができた。また、北原恵先生のゼミでは、研究発表の練習の機会も与えられた。留学生のティーグ・カテリナ・ガブリエラ Teague Katherina Gabrielaさんや大学院生のソアレス・モッタ・フィリッペ・アウグスト Soares Motta Felipe Augustoさんは、英文原稿のネイティブチェックをしてくださり、さらにモッタさんからは、英語での研究発表の方法について、丁寧なアドバイスをいただいた。

このようにして今回の私のサマースクールへの参加は、日本学研究室による全面的なサ ポートによって支えられていた。すなわち、参加に至るまでの動機づけ、現地についての 情報提供、研究発表の練習の場の提供、語学面でのサポート、さらには研究室から交通費 の補助までいただいて、準備万端で研究発表に臨めたことが、私には本当にありがたかっ た。今回のこうしたサポートは、個人的なご好意に頼った側面も大きかったが、今後は、 研究室として、大学院生の海外発表のサポート態勢をどのように整備していくのかという ことが、一つの重要な課題となってくるだろうと思う。やはり、知りあいが一人もいない 海外の大学に独りで行って、慣れない英語で研究発表をするのは、日本国内での学会発表 と比較すると格段にハードルが高いので、研究室にサポート態勢があるか否かということ が、大きな違いを生むはずである。たしかに一昔前に比べれば、現在では、海外のさまざ まな情報を簡単にインターネットで入手できるので、海外の学会情報を個人的に得ること も可能だし、実際、サマースクールで出会った人たちの中にも、そうやってインターネッ トでサマースクールの情報を探し出して参加している人もいた。しかし「日本学」「日本 研究」という分野に普段は日本国内で取り組んでいる日本学研究室のメンバーにとっては、 国外の日本研究に接する機会はきわめて貴重なものなので、研究室として積極的に院生の 海外発表を励ましていくことの意義は大きい。

ANUのサマースクールに参加できて幸運だったと思うのは、送り出す日本学研究室だけでなく、受け入れてくださったANUの側も、発表者を積極的にサポートし、強く励ます雰囲気に満ちていたからだった。ANUのCollege of Asia and the Pacificにサマースクールの事務局が設置され、委員長の池田俊一先生や事務局長の辛島理人先生をはじめ、ANUの先生方や院生の方々が細やかなサポートをしてくださったおかげで、安心し、リラックスした雰囲気の中で研究発表会に参加することができた。研究発表会の前後には新年会や懇親会が企画されていて、初対面の人同士でも親しく話せる場が用意されていたことは、単にその場を楽しむためだけでなく、余計な緊張を解くことによって研究交流をスムーズにするという意味で、とても効果的だったと思う。また、研究発表会の司会をしてくださったナランゴア・リ Narangoa Li先生、リッキー・カーステン Rikki Kersten先生、テッサ・モリスースズキ Tessa Morris-Suzuki先生、ピーター・ヘンドリックス Peter Hendriks先生、サイモン・アンドリュー・アヴェネル Simon Andrew Avenell先生、塚原東吾先生、川端浩平先生が、研究発表にまだ慣れていない院生たちの研究発表会であることに配慮してくださっていたことも、学習環境として素晴らしかった。

このサマースクールの充実度の高さは、設定されたセッションのテーマが多様であるという点からも感じられた。「表象」「歴史」「政治と経済」「社会運動」「移民とエスニシティ」 「言語と文学」「文化」「社会学、社会福祉、ジェンダー」という8つのセッションが設け られ、それぞれのセッションで、さまざまなテーマの発表が行われた。そして、そのように多様な中にも時代性が反映され、東日本大震災と福島の原発事故から一年も経たない時期に行われる「日本研究」であったためか、二つの基調講演はともに、環境、震災と復興、科学と社会、といった時事問題に深く関わる講演内容であり、院生の研究発表にもそうした問題関心からの発表が複数みられたことが印象的だった。発表者のほとんどは院生だが、その年齢層は幅広い。留学中の人や外国での生活経験のある人が多いが、このサマースクールの参加が初めての海外旅行だという人もいた。参加者は意欲的に研究に取り組んでいる人が多く、休憩中の雑談の中でも、研究に関わる意義深い話ができた。

各セッションに割り当てられた時間は1時間40分で、それぞれ3人から4人が発表を行った後、セッション全体のまとめをするという形式だった。発表の際の使用言語は英語だが、日本語を母語とする発表者の中には、質疑応答の時だけ日本語を使う人もいた。発表内容は事前に原稿化しておくことができるが、質疑応答の時には予想外の質問が出されることもあるので、前もっての準備は難しい。私は質疑応答を英語で行うことにしたものの、やはり表現力不足で思うように返答ができず、フロアから助け舟を出していただいたりもした。しかし、そのように発表技術が拙くても真剣に聴いてコメントしてくださる方がいることに、私はとても励まされた。

このサマースクールでは、研究発表会のほかに、ANUの大学図書館や国立図書館の利用方法についてのガイダンスも行われ、オーストラリアで資料調査を行う際に役立つ情報が提供された。私はそのガイダンスを受けた後、自分自身の研究テーマに関わる資料について、ガイダンスの場にいらっしゃったオーストラリア国立図書館の司書の篠崎まゆみさんに質問してみたところ、篠崎さんの非常に丁寧なご対応のおかげで、わずか5日間のキャンベラ滞在の間に、その資料を見ることが可能になった。私は、今回の短い滞在期間中に、研究発表だけでなく図書館での調査までもが可能になるとは予想しておらず、日本での下準備が全くできていなかったが、そんな準備不足の状態でも図書館の閲覧室に足を運んで実際に資料を見ることができたのは、ANUのサマースクールのプログラムの秀逸さとスタッフの親切さゆえである。

ANUからは、発表者全員に、交通費の一部と研究発表会期間中の学生寮の滞在費(食費を含む)の補助があった。寮の部屋は個室になっており、食事時は、ブッフェ式の食事を、食堂で他の参加者と一緒に食べるのが楽しかった。

ANUのサマースクールは、それに参加するだけでも十分に充実感を得られるイベントであるが、ANUの所在地であるキャンベラには戦争記念館や国立美術館等があって、それらの展示はとても見ごたえのあるものなので、サマースクールの前後には、ぜひとも立ち寄ってみられることをお勧めしたい。戦争記念館の展示は日本の近代史との関連が強く

オーストラリア国立大学 Japanese Studies Graduate Summer School 参加報告(林葉子)

て興味深く、国立美術館は、アボリジナル・アートの展示が充実していて素晴らしい。アボリジニといえば、ANUのサマースクールの開会の挨拶の中で、池田俊一先生が「オーストラリアはもともとアボリジニの人々の土地であり、その土地を借りることによって私たちがこのサマースクールを開催できるということについて、アボリジニの人々に感謝する」と最初におっしゃったことが、強く印象に残った。いまこの瞬間に自分が立っている場がどのような歴史性を持っているのかを常に意識する姿勢が大切であることを、サマースクールの開会と同時に教えられ、そのことを強く意識させられるオーストラリアという場に身を置いて「日本」を考える機会が与えられたことに、私も心から感謝する。

最後に、あらためて、ANUのサマースクールに参加するにあたってお世話になった皆様に、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。そして今後、ANU College of Asia and the Pacificと大阪大学大学院・日本学研究室との交流を深めていけるよう、私も微力ながら、今後の参加者を応援していく所存である。

(はやし ようこ 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室助教代理)